有本真紀 著
『卒業式の歴史学』
講談社 2013年3月 四六判 261頁 ￥1680(税込)

水谷智彦

なぜ卒業式では涙することが求められるのか。学校は原則的に泣くことをよしとしない空間である。もし教室で涙を流す子どもがいれば、たいてい教師かほかの子どもがその事態を問題視するだろう。しかし、卒業式という場面で泣くことは問題とはならない。卒業式で涙することはむしろ積極的に求められており、泣かないことは非難される可能性すら有しているのである。

こうした疑問から出発するなかで、本書は卒業式に宿る感情文化の存在を指摘する。この感情文化とは、いつ、どこで、誰が、どのような感情を、いかにして表出すべきかを規定する社会の期待である。一般に、感情とは個々人の内奥より湧き出るものと考えられているだろう。しかしながら、感情表出が社会によって規範的に要請される場面がある。その一つが卒業式なのである。

では、卒業式と涙の結びつきが文化に基づいたものであるならば、それはいかなる過程で構築されるに至ったのか。本書は膨大な資史料を用いて卒業式の成立過程を跡づけるとともに、感情社会学の視座から資史料を読み解き、涙と卒業式の結合過程とその意味を解明している。こうした作業を経るなかで、卒業式と涙に刻印された感情の共同体形成のメカニズムが明らかにされてゆく。

歴史的考察は、明治初期の中等・高等教育機関における卒業式に始まり（第1章）、近代学校発足当初の小学校では、卒業証書授与は試験と結びついていた事実が指摘される。明治前期の小学校は、試験及第者のみに進級を認めていた。その及第者に対し、試験当日に手渡される免状が卒業証書であった。多数の落第者を生んだ試験は、近代原理に照らして望ましい生徒を選別する装置であり、卒業証書の授与は「優等生」への権威性の付与を意味していたのである（第2章）。

教育令期・第一次小学校令期には、就学率の上昇、一校当たりの生徒数増加により、証書授与は試験とは異なる日に「式」として挙行され始める。このことは式次第の必要性をもたらし、卒業生の群れは、卒業生「一同」と名づけられるようになる。生徒が一斉に学校から離別する儀式としての卒業式が登場するのである（第3章）。

第二次小学校令期には、卒業式と特定の季節（3月下旬）の結合、学力差によらずに児童を編制する学級制への転換が生じる。年度やクラスの統一化が進むとともに、1891（M24）年の祝日大祭日儀式規程によって、地方自治体や訓導協議会が卒業式の式次第を作成、各学校に示すことで式次第が定型化する。この式次第は、参加者のふるまいを細部まで規格化し、卒業式を国家のための厳格な儀式へと変貌させることとなる（第4章）。

第三次小学校令期には就学率がほぼ9割に達し、平素の成績による卒業認定が制度化、学級に所属する児童の年齢が均質化する。こうした傾向が卒業生をより同質性を有した集団にする。また、定型化された式次第は、卒業生／在校生という区分を生み、式中で学校生活の思い出や感謝や愛情をお互いに表明し合うよう求めた。この応答し合う関係性と語りの形式が、児童たちを感情の共同体として連帯させ、自らが児童であったという記憶を確固たるものとする。さらには、こうした式の構造が卒業式を物語へと変貌させる。涙はこの物語のクライマックスに喚起されるのである（第5章）。続く章では、感情を呼び起こすもう一つの要因たる卒業式歌の分析が行われる（第6章）。

内容を駆け足にみてきたが、本書最大の特徴は、式次第中の手順や参与者の編成方法、その応答といった一見些細な規定の中に感情の共同体形成の契機をみたことだといえよう。細部に至るふるまいの規定や、連帯感情と学校の一員であったという記憶をつくり出す語りの形式が、日本近代における感情の共同体を生み出した。本書は卒業式に埋め込まれた政治性を明らかにするだけでなく、われわれを常にどこかで取り囲んでいる感情文化を、意識的に捉える視点を与えてくれるだろう。